第 38 回全国削ろう会

北海道いわみざわ大会　鵡工舎小川三夫棟梁対談講演会記録

- これから大工を目指す方、
大工の指導者に向けて -

発行者：大工ネットワーク北海道
協力者：（一社）北海道ビルダーズ協会大工育成委員会

「大工ネットワーク北海道」のご紹介

大工ネットワーク北海道とは・・・

大工職人の人数が年々減っている状況下で、大工同士が様々な情報交換をする大工職人のネットワークであり、職場環境の改善を進め大工職人の社会的地位の向上を目指して、活動していく企業横断型の職人団体です。

４つの目的

1．仲間をつくろう
2．新人を育てよう
3．技を磨こう
4．大工の社会的地位を高めよう

５つの活動方針

1．言い出しっぺがやろう
2．仲間をまき込もう
3．みんなに伝えよう
4．自まかないでやろう
5．社会的ルールを守ろう

【お問合せ】
大工ネットワーク北海道事務局（武部建設株式会社三笠事務所）
TEL:0126-2-2312　FAX:01267-2-2804

「（一社）北海道ビルダーズ協会 大工育成委員会」のご紹介

（一社）北海道ビルダーズ協会 大工育成委員会とは・・・

北海道ビルダーズ協会は、会員工務店と連携し、大工技術を実践的に習得できる機会をつくるなど、若手大工の育成に取り組むとともに、大工の社員化などを含めた雇用の安定化、キャリアアップシステムの導入に取り組んでいます。

大工育成委員会の事業

１．育成事業

新人大工育成プログラムの研修

新人大工座学研修会

技能向上研修会

基本技術研修会

２．担い手の確保

キャリアアップ研修会

職業・技能研修会

（一社）北海道
ビルダーズ協会
ホームページ

鉋 削ろう会

削ろう会とは

鉋削りをはじめ、手道具や伝統技術の可能性を追求する会です。

大工をはじめとする木造・木工関係の職人のほか、その工具を作る鍛冶、手道具や職人に興味のあるアマチュアが集まって、競い・楽しみながら技術交流をしています。

伝統の技の習得や自身の腕の向上を目指し、それぞれが習練し交流する中で、日本の木造建築や木工芸の技術・文化を次世代につなげていきます。

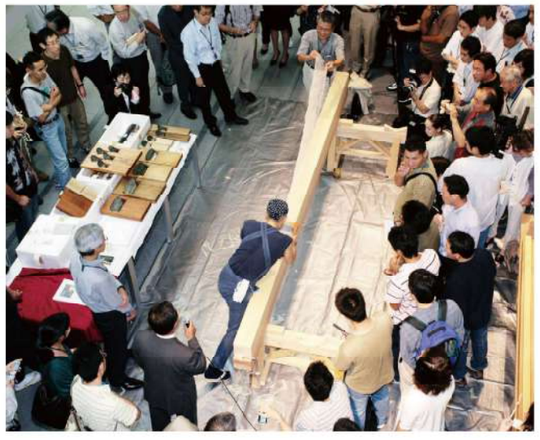
削ろう会の活動

削ろう会では、薄削り競技を中心に道具の展示販売や勉強会などの催しである「削ろう会全国大会」を、日本各地で年一～二回開催しています。

削ろう会は道具の使い手とつくり手との交流の場でもあります。全国大会の会場で道具の展示販売をする際も、決して商売だけが目的ではなく、使い手とつくり手が顔を合わせ意見交換をする機会となっています。

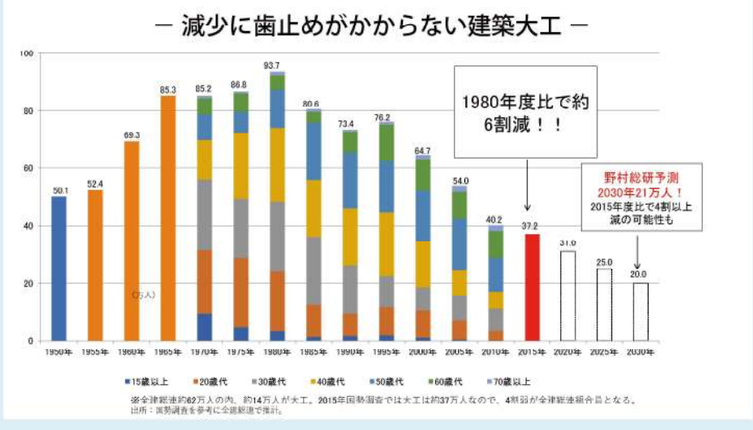
また、年に四回発行している会報には、削りや手道具、鍛冶の記事や全国大会の案内やレポートなどを掲載しています。

削ろう会
ホームページ



人数の減少率と高齢化が著しい大工就業者

近年、他の建築技能者同様、大工の減少は危機的な状況になっています。脱炭素社会に向けて木造建築に追い風が吹いているにも関わらず、その中心的担い手である大工の高齢化が進み、若手新規入職者が少ない現状を改善することは、工務店及び建築業界において喫緊の課題です。



北海道いわみざわ大会 開催の概要と意義

令和四年十月十五日（土）と十六日（日）の二日間、北海道岩見沢市を会場に「第三十八回全国削ろう会 北海道いわみざわ大会」を開催しました。

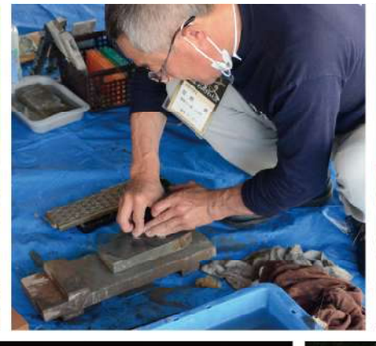
当大会は、全国の大工職人の交流、親睦と大工道具鍛冶の顕彰を目的としており、当日は、鉋での薄削り競技や木育体験学習、全国の有名大工道具の展示即売等を実施しました。

また、同日開催の「北海道住宅フェア」と連携し、北３条広場（札幌市）の会場において、市民が鉋削りを体験できるブースなどを設置しました。

さらに、当大会の特徴的な取組として、木造専門の大工育成の視点を大切に、若手大工を対象とした大工道具研修会の実施や、鴟工舎の小川三夫棟梁を迎えた対談講演会を実施しました。

※対談講演会の詳細は次頁以降参照。

北海道いわみざわ大会の様子



講演会テーマ

町場大工の指導棟梁と大工の在り方 ～大工も普通の人～

西岡常一棟梁との内弟子時代の体験や鵠工舎における弟子の育成を踏まえて、弟子育成の作法と心構えを町場大工の指導棟梁・見習大工と小川棟梁が対話する

開催日時：令和四年十月十五日（土）午後四時～五時
開催場所：岩見沢コミュニティプラザ
　　自治体ネットワークセンター四階マルチメディアホール
ゲスト：国土交通省住宅局住宅生産課木造住宅振興室　石井秀明室長
　　北海道建設部建築局　石丸貴康局長
　　北海道ビルダーズ協会大工育成委員会　首藤一弘委員長

講演者　小川三夫氏（宮大工 鵠工舎棟梁）

《略歴》
昭和二十二年、栃木県生まれ。
高校生の時に修学旅行で法隆寺を見て感激し、宮大工を志す。
二十一歳の時に法隆寺宮大工の西岡常一棟梁に入門。唯一の内弟子となる。
法輪寺三重塔、薬師寺金堂、同西塔の再建に副棟梁として活躍。
昭和五十二年、寺社建築会社「鵠工舎」を設立。以後、今日まで全国各地の寺院の修理、再建、新築などを続ける。
著書に『木のいのち木のこころ（天・地・人）』（新潮文庫）『棟梁　技を伝え、人を育てる』（文春文庫）などがある。

対談者１　船田慎人氏

（武部建設大工棟梁、大工ネットワーク北海道代表）

《略歴》
昭和五十四年、北海道月形町生まれ。
青山建築デザイン専門学校卒業後、大工を目指して武部建設株式会社に入社。
佐藤洋悦棟梁のもとで修行。
高断熱高気密の高いレベルの省エネ住宅から民家再生、墨付け手刻みによる大型木造建築までこなす棟梁。
一級建築大工技能士、二級建築士、建築大工基幹技能者。
ものづくりマイスター。
大工ネットワーク北海道代表。

対談者２　柳原万智子氏

（武部建設大工、（仮称）全国女性大工の会）

《略歴》
平成六年、北海道室蘭市生まれ。
北海道大学農学部大学院を中退し大工を目指して武部建設株式会社に入社。
見習大工として三年間墨付け手刻みの修行後、現在は後輩の指導をしながら更なる技能習得を目指して奮闘中。
全国の建築女性職人の団体設立にも参画している。

コーディネーター　羽深久夫氏

《略歴》
昭和三十年生まれ。
昭和六十二年東京工業大学大学院理工学研究科博士後期課程建築学専攻単位取得満期退学。
平成七年恩師平井聖先生の勧めで、清家清先生が校長の札幌市立高等専門学校デザイン学科に着任。
平成十二年熊本大学大学院より博士（工学）取得。
平成二十二年公立大学法人札幌市立大学大学院デザイン研究科教授。
令和二年公立大学法人札幌市立大学　名誉教授。

大工という仕事

西岡棟梁の道具

小川…大工、職人というのは紳士だと思う。嘘がつけない。職人は言い訳が下手なので、いくら言い訳をしても駄目で、どうしようもない。そのような世界に私は生きている。

私はお寺をつくる大工だが、家を作る大工と仕事は一緒である。宮大工は大きな木を使うところが違って、普通の家は小さな木を使うため、木の癖は押さえ込むことができるが、大きな木を使うと木の癖が出る。ただ、仕事自体はみんな一緒である。

室町時代に大工道具がたくさん発達し、道具の発達とともに、構造の技から装飾の技に変わっていった。道具という のは人間がものづくりをするための指の延長である。手では削れないので道具を十分に使いこなすことが必要である。

私が西岡棟梁に弟子入りした時、これから一年間は刃物研ぎをしなさいと言われた。棟梁と同じような鉋屑ができるまで練習し、道具に恥じる仕事はしなくなることを、道具が教えてくれた。

執念のものづくりを　する人を育てる

小川…今も昔も大工は執念でものをつくるが、執念のものづくりをする人を育てるというのはなかなか難しい。それを教えることはできなくて、その人自身が感じ取ることである。四十数年この仕事をしてきて思うのは、日常が辛く厳しくあるほど、執念のものづくりができる人に繋がることに気づく。甘い生活をしているようであれば、そこまでの人にはならない。

自然と手と体が動いていくということは長い時間がかかるということ。簡単に職人は育たない。時間をかけて体に記憶させていくことである。古代建築を作り守ってきた技は、職人の手や体の記憶である。残ってきたものを文字や数字だけで直したりつくると、千三百年の間に違う形になっていただろう。

伝統の引き継ぎでもなく、嘘偽りのない仕事をしておくことが大切である。本物を作っておきさえすれば、技術は時代を超えて蘇るのである。

どうすれば若手大工が辞めずに続けてくれるか

羽深…小川棟梁のお話を受けて、柳原さんと船田さんから現状やこうしたいという想いを話していただきたい。

柳原…私自身が大工を始めて5年目で、先日小さな建物を一人で任せてもらえましたが、まだ満足いくようにはできない現状です。正直、私自身がうまく育っているのかがよくわからない状況で、後輩たちも多くいますが、彼らが仕事を辞めずに続けてくれるか不安であるというのが正直な気持ちです。

若い人たちが多くいる中で、どうしたら彼らが辞めずに、いい大工が育っていくのかと考えています。鵡工舎の場合はみなさん生活も一緒にすることで、先輩たちの姿から学び取っていくのだと思うのですが、自分たちは別々に暮らしている現状で、現代のスタイルにも合わせながら、どうやってうまく大工育成をしていくかが課題だと思っています。

小川…私の会社では、仲間みんなで仕事や生活を一緒にしており、それが一番大切だと思う。若手大工は初めは仕事はできないので、初めの仕事は飯炊きと掃除である。その仕事を一生懸命やって、少しみんなから感謝され、そろそろ道具を手入れするなどとなる。朝五時に起きてご飯を作って食べ、仕事の後、夜五時半からご飯作って六時に食べる。ご飯の後は買い出しに行き九時くらいに帰宅し次の日の段取りをして、道具の手入れを行って就寝する。みんな一緒に生活をせずに仕事場に通っても良いが、家に帰ったら道具を研ぐなどしたら良い。仕事を終えて家に帰っても、寝ても覚めても三年間ぐらいはそればっかりに浸ると、なんとなく見えてくるのではないかと思う。

自分で考え・努力・苦労し、精一杯取り組む姿勢が大切

船田…私が二十歳の時に武部建設に見習いで入った際、お世話になった棟梁は四十歳くらい離れていた方だった。その方からは、仕事について一切教えないと言われた。

一つ言えることは、ただ教えてもらったことは忘れがちであること。自分で苦労や努力をしたり、辛い思いをしたことはほとんど忘れていない。自分から若い人へは、とにかく自分で考えてほしいと伝えて考えてから、自分のところに聞きに来てほしい。「分からないので教えて欲しい」という問いかけは受け付けないようにしている。

自分が若い時にお前の精一杯はその程度か、もっとできるんじゃないか、もっと複雑な細工でもっと早くできるんじゃないか、と別の棟梁に言われた。辛い思いをしたことは本当に今も頭に残っていて、自分はそこが揺らではいけないと思っている。棟梁に言われたことは、今も守るようにしている。

羽深…若手の方が入ってきて、自分が育った時の環境に合う人以外もいると思うが、どのように指導しているのか。

船田…そこが難しく、日々、自問自答しているところである。厳しくしすぎても駄目かもしれないが、壁にぶち当たった時に辛い思いをしていないと、ある拍子で潰れてしまう。

全く何も言わないで教えないというのは今の時代はできないかなと思うが、若手がだらけているなどを注意できない環境は駄目だと思う。ただ、一から十までは絶対教えない、そこには自分で考えて欲しいという想いがあそこには自分で考えて欲しいという想いがある。そのように自分の考えで指導している。

今だから言えるが、我々は住宅を建てる仕事ということで、お客様の財産を作る仕事であり、こんな素晴らしい仕事はない。

小川…船田さんは一生懸命人を育てようとしていると感じる。弟子が船田さんのようになりたい、となっていれば良い。そうすれば何も言わなくてもついてくる。

不器用の一心に勝る名人はいない

羽深…船田棟梁の話は小川棟梁の話とかなり重なる部分があると感じた。

改めて、柳原さんはなぜ大工になりたいと思ったか、その時考えていたことと、今五年たってその考えがどうなったか教えてほしい。

柳原…私が大工になった理由は木が好きだったからです。元々林業に興味があり、学校で林業の勉強をしていましたが、木を伐採する方ではなく、自分で何か作れる人になりたいと思い、今の仕事に興味が湧きました。武部建設に入った理由は、鑿や鉋を使って自分で木を加工する仕事が多いためです。

四年間働いてみて、ものづくりが好きだったのだなと改めて思いました。私は手先が器用な方ではなく要領も悪いので、結構苦しい想いをしたと思いますし、今でもそのようなことはあります。要領の良い人を見ると羨ましいですが、今は自分が納得する仕事をしたいと思い励んでいます。

小川…不器用だというが、不器用の一心に勝る名人はいない。

長い年月のかかる大工育成

羽深…大工の育成について、北海道ビルダーズ協会の方にも聞いてみたい。

首藤…多くの工務店が大工に対して何を求めているか。お客様の要望で予算と工期を決め、ものを作らなきゃいけない。その中で、大工の腕の良さよりも、手早く予算内で実施してくれる大工がエ務店にとってはありがたいと言う話を聞くことがある。三年、五年、十年かけて一人前になる人も大切だが、即戦力になる人が欲しいのが本音。短期間で、仕事をしなきゃいけないのが民間の現状にある。

大工の入職が厳しい中、そこの魅力づくりを民間の中でどのようにできるだろうか。

小川…私のところは二十年程前であれば、年間に二百五十人くらい就職希望者が来たが、今は二十人くらいになっている。

最初の三年くらいは辞めないでほしい。五年経つとやっと利益を出せる仕事ができる職人となり、十年で独り立ちできるようになる。

羽深…技術者と技能者では、社会保険の制度に違いがあるなど課題があるが、若手大工を単純に教育していくべきなのか、その辺りの展望について、国土交通省住宅局住宅生産課木造住宅振興室の方に聞きたい。

大工に対する「好き」という気持ちを無駄にしないために

石井…今は人材の話は量のことしか語られていないが、少なくとも量も確保できなかったら、この産業は今後どうなってしまうかと不安になる。三年から五年くらいで、入職した人が辞めてしまうことが、みなさん圧倒的に課題と思っている。辞めたいと思ったことがあったか、その時に実際やめなかった理由などを大工のみなさんに伺いたい。

船田…実際のところ辞めたいと思ったことは、今回ある。ただ、辞めたいという気持ちより、この仕事が好きな気持ちが圧倒的に強い。そんなことを考えるより仕事のことを考えている方が好きである。

柳原…私は強く辞めたいと思ったことは一度もありません。離職する人たちのところ一度もありません。離職する人たちが、会社が嫌で辞めるのか、大工が嫌なのか、を考える必要があると思います。大工は基本的にものづくりが好きだと思うので、辞めていく人を係や社会制度のことなどで、辞めていく人を減らしていくことができたら良いと思います。

小川…私も辞めたいと思うこともあった気がする。西岡棟梁は全然そのようなことにタッチもしてくれないし、ほったとかれっぱなしで自然に残ってやっていたという感じ。

辞める子はたくさんいる。来るもの拒まず、去るもの追わずだが、会社に魅力があれば辞めないだろう。その子が、一生懸命、安心して仕事ができるような環境を揃えておかなきゃいけない。

羽深…最後に一言。全国削ろう会いわみざわ大会において小川棟梁と大工ネットワーク北海道の若手大工に、国交省住宅局木造住宅推進室石井室長、北海道建設部建築局石丸局長、北海道ビルダーズ協会大工育成委員会首藤委員長を交えて、6つのキーワード群を踏まえながら大工育成について話し合えたことは極めて重要である。

現在の宮大工でも町場大工でも、彼らを取り巻く環境は3Kだけでは語れるものでなく、もっと真剣な議論が必要である。若い大工の育成を地域工務店、労働環境を行政、職業教育を高専・大学が総合的にプログラム化しないと駄目で待ったなしである。

【講演会のキーワード】

○取り巻く社会的課題
- 若手新人大工の確保
- 育成時代の社会保障
- 育成後・修行後の働き方
- 情報化時代の大工仕事におけるAI化とロボット化→熟練大工は生き残れるか？

○指導棟梁
- どんな大工を目指し、大工を指導するか？
- 何が深かまるのか、人間性・技能・技術
- 社員大工、専属大工、一人親方大工（個人事業主）、常用大工

○見習い大工
- 大工になった動機
- どんな大工になりたいか？
- 修行時代の気構え・心構え・身構え
- 見習大工から、大工、棟梁
- 住込み修行
- 辞めない理由、辞める理由

○行政
- どんな大工の労働環境をつくるか？
- 国土交通省・厚生労働省、北海道建設部・北海道経済部
- 元請制度と下請制度
- 建設業許可における建築一式工事業とその他専門工事業
- 技術者と技能者の違い→大工は技能者で、下請けなのか？
- 社会保険と国民健康保険、厚生年金と国民年金

○経営者の立場（地域工務店）
- どんな若者を入れ、どんな大工を育てるか？
- センスとカンは必要か？
- 鵡工舎の大工と町場大工の違い
- 大工育成カリキュラム＋人間育成
- 衣食住の保障
- 労働契約としての雇用保険
- 職場環境をどう整える？
- 日常の育成と研修（OJT と OffJT）
- 在来工法の新築・改修、歴史的建造物の修理・保存・活用への対応
- 耐震補強工法、省エネ工法、在来軸組工法への対応

○高等教育機関における建築教育
- 義務教育と職業教育
- 全国に約 250 の建築教育機関、約 10000 人の新卒者→卒業すれば、技能者でなく技術者
- センスのない、カンの悪い学生もいる→業種を問わず収まり、生きていける